

近代日本の独立住宅における空間構成

日本において建築家が出現し、更に独立住宅に取り組むようになったのは、西洋文明や文化の直輸入が始まり、社会構造をも変え始めた明治維新以降である。居留地の洋風住宅、そして政府高官や貴族、大富豪の洋館が建てられていった。また、重工業の発展は人口の集中を促し、都市近郊には産業資本家や、労働者のための住宅が建設され、郊外住宅地の発生を見ることになる。こうした潮流のなかで、独立住宅を芸術の対象とする建築家も出現する。社寺、宮殿等を中心に発達してきた〈芸術としての建築〉も、近代に入ってから、都市近郊に建つ〈独立住宅〉をその対象に入れることになるのである。

近代都市を代表する建築は、中央部のオフィスビルと周辺部の独立住宅であるが、空間構成という点からみると、後者の方がより興味深い。なぜなら、構成に自由度の多い低層建築は、水平スラブを積み重ねる以外に方法のない高層建築とは異なり、作家の思想を端的に反映しうるからである。更に、オフィスビルが収益に基づくのに対し、住宅が居住を目的とすることも、その理由の一端となろう。

以上のように、建築家による〈芸術としての独立住宅〉は近代特有の現象であり、作家の思想がダイレクトに表現された作品でもある。〈独立住宅〉に注目し、考察対象とする理由がまさにここにある。

ごく大ざっぱに言うと、西洋の19世紀、日本の明治時代は、〈様式の時代〉であった。様式と言って誤解を招くのならば、表層表現と言い替えてもよい。建築家のエネルギーは、建物内外の表層表現に集中した。彼らは、建物各々の機能に対応した様式を追求し、その議論に熱をあげた。「市庁舎は古典主義であるべきであり、教会はゴシックであるべきだ」等々。そして学生達は、様式的細部の修得に腐心した。一方、西洋の20世紀、日本の昭和は、〈空間の時代〉であった。多くの建築家が「空間」を語り、イメージする空間を創り出そうと努力した。「流動的空間」、「均質空間」、「機能的空間」等、「空間」という言葉が頻繁に使われた。「空間」の定義を厳密に示し得た建築家はいない。また、たとえ示し得たとしてもさほど意味のあることとは思えないが、ここでより重要なのは、「空間」を念頭に置いて創作していたということであろう。「空間」を叫んで創られた建築は、「様式」を主張して創られた建築とは、自ずから異なっていることは言うまでもない。19世紀の建築の分析に、様式表現のグルーピングによる様式論や、様式史が的確に当てはまるように、20世紀の建築の分析には、空間構成の分類による空間構成論や、空間構成史なるものが当てはまると考えるのは、以上の理由による。